

# 第十回 九州戯曲賞 最終審査過程

九州地域演劇協議会まとめ

## ■最終審査日時等

令和4年6月18日（土）福岡市内会場

## ■最終候補作品（5作品）

川口 大樹（福岡県福岡市）『甘い手』

中島 栄子（福岡県宗像市）『モルヒネ』

穴迫 信一（福岡県北九州市）『眺め』

馬場 佑介（福岡県福岡市）『カドがとれて、遠くなって、白くなって、夏』

日下 渚（大分県大分市）『漣ーさざなみー』

## ■最終審査員

岩崎正裕 松井周 岡田利規 市原佐都子 幸田真洋

## ■審査結果

大賞 中島 栄子（福岡県宗像市）『モルヒネ』

## ■授賞方針等

- ・大賞作が出た場合、原則として他の賞は出さないものとする。
- ・大賞作の水準に達する作品がない場合は、大賞なしとする。
- ・大賞作がない場合、佳作・奨励賞の賞を出すことが出来る。

## ■審査過程

各作品について、審査員からの講評を行う。

### 川口 大樹(福岡県福岡市)『甘い手』

高校生と先生、そのコミュニティを描く青春コメディ。若者特有の感覚や言葉が様々なエピソードとともに重層的に展開される。

作者が作り上げようとしている世界観は成功している点は評価されていた。特に言葉として面白いものがあるというところは多くの審査員で共通するものであった。

場面間の繋がりに関して丁寧さに欠ける部分があるとの指摘があった。戯曲として読んだ時にコメディ的な世界観が読み手に適合するかどうかというところで評価が分かれた。

### 穴迫 信一(福岡県北九州市)『眺め』

森、日差しといった登場人物によって1000年規模の世界が描かれる抽象的な作品。ノミやアシダカグモといった存在が登場し、寓話的に物語が進んでいく。

既存の雰囲気ではない作者自身が捉えた感覚が表現されている点が評価された。中途半端なせりふがなく、どの言葉も非常に練られたものであるところも注目された。

一方、作者がねらいとしていることと、実際に書かれているものとの間に溝があり、たくらみが十分に達成されていないのではないかという意見もあった。

### 中島 栄子(福岡県宗像市)『モルヒネ』

発達障害をめぐる主人公とその家族の葛藤を描いた作品。モルヒネが投与される臨終の母の姿を背景に主人公のモノローグが展開される。

発達障害を抱える家族の問題について、言葉から感じられる切実さは多くの審査員から注目された。また、仏壇や意識のない母に対する語りかけの表現が高く評価された。

一方、前半の説明的なモノローグになってしまった部分について指摘があった。また、舞台上演を想定した時の空間の設定などについて疑問が残るという声もあった。

### 馬場 佑介(福岡県福岡市)『カドがとれて、遠くなって、白くなって、夏』

女性2人と男性1人の若者による共同生活を描いた作品。共同生活が成り立っていくまでの前半と関係性が破綻していく後半部分に大きく分けられる。

若者同士のリアルな対話と複雑な関係性をうまく扱っている点で共通認識が得られた。ネコという存在を鍵に、多様な読み方ができる作品として、様々な意見が出された。

まだ作者自身が表現しようと思っていることが十分に形にできておらず、言葉についても十分に吟味されていないのではないかという意見があった。

## 日下 渚(大分県大分市)『漣-さざなみ-』

大分の地域性や多様な年齢の役の存在が特徴的な作品。コロナ禍という現在の問題を設定に取り入れながらそのなかに戦争の記憶も織り込まれている。

応募作品中でも登場人物が多く、年齢層も幅広いものであったが、それらがきちんと書き分けられており、その手腕については高く評価できるということで審査員の一致を得た。

一方で、宇宙を題材とすることの必然性、演劇としての新しさという点であと一步を期待したいという指摘もあった。

### (休憩)

ここで1回目の投票を行った。

『眺め』                   ○3票  
『甘い手』               ○1票  
『モルヒネ』             ○3票、△1票  
『漣-さざなみ-』       ○1票

1回目の投票後、投票のあった4作品を中心に作品についての議論を深めていき、2回目の投票を行った。

『眺め』               ○1票  
『モルヒネ』       ○2票  
(審査員3名による投票)

審査員3名の投票が終わった段階で、投票前にまだ討議を続けたいという意見があり、『眺め』『モルヒネ』の2作品についてさらに議論を行い、以下の投票結果となった。

『眺め』               ○1票  
『モルヒネ』       ○4票

この投票結果を見て、最多得票作品である『モルヒネ』を大賞とすることで全審査員の意見が一致したため、同作品を大賞作品として決定した。